電車ピエロ

葉崎あすか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電車ピエロ

【Ｎコード】
Ｎ２３２５Ｆ

【作者名】
葉崎あすか

【あらすじ】
ぼくは、東間渉。中学二年生。読書が大好きで、いつも本を読んでいる。それだけなのに、ただ、本を読んでいるだけなのに……。
――あ、「消えない靴０４」がない……。――番号を間違えただけなので、気にしないでください。

走る電車　01

ぼくはいつも、電車の出発十分前にホームについてしまう。
それは、ぼくが五分前行動を心がけているので、ぼくの右腕にある時計を五分早く進めてしまうせいだ。でも、腕時計を見るときには、不思議と五分進めていることを忘れているので、さらに五分前行動をとってしまう。
だから、十分も早くホームについてしまうのだ。それは、しょうがないと言ったらしょうがない。まぬけと言ったらまぬけ。ま、どちらでもよい。
十分早くつくからといって、時計の時刻を元に戻そうとも考えないし、時計を見るときに五分早めているのだと、無理やり思い出そうとはしない。
なぜなら、ぼくには何の損も生まれないからだ。
逆に、さらに五分間の余裕が生まれる。
それでいい。いや、それがいい。
急がない。焦らない。迷わない。
それが、ぼくの目指すところなのだから。
今日もぼくは、駅に向かって歩いていた。右腕の時刻は電車到着まであと八分。駅に着くまであと三分ほど。
今日も、十分前にホームへ到着しそうだ。
ピッと電子音がして改作口を通る。
ぼくが乗るのは一番線。改作口のすぐだ。
時計を見る。
針が一定の速度で動くアナログ時計だ　（一定の速度で動かなかったら、アナログでもデジタルでも時計ではない）　。電車到着まであと五分。
いつも通りだ。
ホームを見渡すと、ぼくと同じ高校の制服が多い。単線な上に、

田舎へ向かう上り方面だからだ。
それも、いつも通りだ。
ただ、ひとつだけ違うことがあった。
それは、どう考えても場違えな……。
「ピエロ……？」　ぼくの目に間違えがなければ、白い化粧に赤い唇、赤の白の帽子と服のそれは、通勤通学の服装とは到底思えない。遊園地にぴったりな、ピエロそのものだった。
そういえば、周りもざわついている。
ぼくも数分、ピエロの見入ってしまった。
ピエロは、大げさな素振りで天を仰ぎ、一気に頭を地面につけようとしていた。
まるで、神に謝っているかのように。
それを、何度も繰り返す。
何度も何度も。
きっと、ぼくがこれをやったら、頭がフラフラになっていたことだろう。
きっと、なにかのイベントだろう。イベントにしては変だけれども。
ぼくは、片手に持った文庫本に視線を落とす。もうすでにぼくの興味は、風変わりなピエロから今読んでいる本へと移った。
アナウンスが入る。もうすぐ電車が来る。
いつもより、本のページが進まなかった。
これも、すべてあのピエロのせいだ。

走る電車　02

学校に着くと、クラスで一番喧しい網野健吾（あみのけいご）が、ぼくに話しかけてくる。

「見たか？　あのピエロ」

「ああ、駅の……」　ぼくは、教科書をカバンから机の中に入れながら答える。文庫本は机の上に。

「そうそう。あれ、なんなんだろうな。知っているか？　渉（わたる）」

健吾は周りを見渡している。ぼく以外の話し相手を探しているのだろう。だが、まだ教室にはぼくと健吾以外誰も来ていなかった。

駅では、同じ高校の制服を着ている生徒がたくさんいたのに。

これはどうしたことだろう。こんなことは初めてだ。

そういえば、電車に乗っているときいつも満員の電車が、今日はやけにすいていたような気がする。

文庫本を読んでいたので、今まで気がつかなかった。

「いや……」

ぼくは、弁当のみが入ったカバンを机の横に引っ掛け、文庫本を手に取った。今日は、学校が休みだったのか知らないが、今は、この本を読みたかった。

今、一番人気があるといわれているミステリィ。ぼくはこの作家の人気が出る前から好きだったんだけれ扉る作品から途端に人気が出始めて、ぼくは少し嬉しかったりする。今は、探偵が謎解きをしている最も重要なところ。本当だったら、駅のホームで読み終えているはずだったのに。

「誰も来ないな」

「ああ」　一応、返ことはするけれど、ぼくはすでに本の中だ。

「――と言うわけです。お解りいただけたでしょうか。さて、次の謎ですが……」

東間(あずま)は、椅子から立ち上がると関係者が座っている椅子後ろの周りを歩き始めた。まるで、ハンカチ落しで遊んでいるかのように、東間の顔は微笑んでいた。

「時計の針を動かし、皆を混乱に落とし入れた……」　東間はゆっくりと口を動かす。

「一体誰なんだね？　早く言いたまえ」　加藤が椅子から立ちあがろうとする。東間はそれを手で制した。

「落ち着いてください。もう、事件は起きませんから」　東間は、両目をつむった後、ゆっくりと開いた。

「なぜなら、犯人は――」

ガラリと音を立てて、誰かが入ってきた。

顔を上げる。読書時間を邪魔した奴を見てみたかったからだ。こんなことは、滅多にない。たぶん、いつもより教室が静かだからだろう。

健吾を見ると、ぼくの隣の机に座って、携帯電話をいじっていた。その手を止めて、扉の方を向く。

ぼくも扉見る。

入ってきたのは、クラスメートの菊間乃里(きくまのり)だ。

走る電車　０３

「あ、東間(あずま)君、網野君……。二人だけ？」　カバンを両手で持ち、首を右へ傾ける菊間。

「そう、渉とオレだけ。何でか分かるか？　菊間」

「え？　なにそれ、問題？」　菊間は、カバンを自分の机に置きながら、今度は左へ首を傾けた。どうやら、耳に水でも入っているようだ。それとも、頭が重くて首で支えられないのか。

「違う。聞いているんだ。今日学校休みだったっけ？」　健吾の言葉を聴き、菊間はカバンの中から携帯電話を取り出した。折りたたみ式の携帯電話が開くと同時に、親指がここぞとばかりに仕事をしていた。

「いや、何も書いていないから、休みじゃないと思うけど……」

どうやら、カレンダー機能を使っていたらしい。

次に菊間は、何度かボタンを押して、携帯電話を耳に当てた。

不可解な沈黙がその場を包む。

何もすることが無くなった。と言うより、当初の目標は果たせた。ぼくの読書時間を邪魔した奴を見ることだ。菊間乃里。果たせたことによる利益は無い。

ぼくが再び、本の中へ戻ろうとするのを、健吾に止められた。

「こんなときに、本なんか読むなよ」

え？

こんなときって、どんなときだろう。

駅のホームでピエロが頭を下げていたときだろうか。

教室に三人しか登校していないときだろうか。

いずれにしても、本を読んではいけない理由にはならない。

そのことを、健吾に言いたかったけど、面倒なのでぼくは本をカバンの中に入れた。

「出ないわ……」　菊間は、携帯電話をパタンと閉じると、ぼく

らのいる方を向いた。
「誰に電話したんだ？」　健吾が聞く。
「かんな。出ないときなんて今まで一度もなかったのに……」
かんなとは、同じクラスの盾椅子（たていす）かんなのことだろう。
それにしても、
どうして、一度も携帯電話に出なかったぐらいで、あんなに不満そうな顔になるのだろう。
ぼくには、それが不思議でしょうがない。
誰にでも、都合が悪い時だってあるものだ。
菊間は、盾椅子を自分の家来だとでも思っているのだろうか。
いつでも、私の話し相手をしてくれる家来だとでも思っているのだろうか。
不思議だ。
実に。
「薫子（かおるこ）にもかけてみよう」　菊間は、携帯電話をまた開くと、耳に当てた。
また始まる、不可解な沈黙。だが、それは菊間の明るすぎる声で壊された。

走る電車　０４

「あ、もしもし、薫子？　どうしたのよ。学校に来ないで。みんな心配しているんだから、って、三人だけだけど……。――――。そうなの、みんな来ていないのよ、どうしてなの？　――――。えっ、電車が止まっている？　ウソでしょ。――――。わたしは地元だから電車使わないけど、現に、二人来ているし。――――。ん？　東間君と網野君だよ。地元じゃないでしょ。――――。え？　電車が来た？　ああ、それは良かった。んじゃね、バイバイ」

菊間は、携帯電話を閉じた。

「おい、渉、電車止まっていたんか？」　健吾がぼくに聞く。

「まさか、ぼくはちゃんと電車で来たよ」

「んなわけないだろ。今の話聞いていたか？　電車が止まっていたんだってさ」

「いや、だから――」

「ねえ、ちょっと」　菊間がぼくの言葉をさえぎった。

「網野君は、東間君と同じ中学だったんでしょう？　網野君も、電車で来ているんじゃないの？」　それは、もっともな意見だ。でも、違う。

「いや、オレは、自転車で通っているからね。ひ弱な東間とは違うんだ」

「ふーん、じゃあ、ピエロのことは知らないんだ」　菊間は軽く腕組みをした。

「いや、知っているぜ。オレの家は駅の目の前だからな。家から出るだけで、ホームが良く見えるんだ」　健吾は続ける。　「そういや、なんで地元の菊間がピエロのことを知っているんだ？」

菊間は腕組みを解いた。

「……ああ、さっき、薫子が言っていたから」

「へえ。そうは聞こえなかったけどな」　健吾は、ぼくに向かっ

て囁いた。ぼくは、一応うなずいたけれど、そんなことはどうでも良かった。今は、ぼくと苗字が同じのあの探偵が、解く謎を一刻も早く知りたかった。

消えない靴　01

三時間後には、通常授業が始まっていた。と言っても、電車が遅れたようなので、一、二時限目が潰れ三時限目からのスタートだった。

電車が遅れたのは、人身事故であった。全く、迷惑な話だ。死ぬのなら、人に迷惑がかからないようにしないと。

それにしても、どうしてぼくは普通に電車に乗れたのだろう。

ま、いつも通りが一番いいから別にいいんだけれども。

いや、いつも通りではないかもしれない。健吾がずっとぼくに話しかけてくるので、カバンから本を取り出すタイミングを失ってしまった。

今は、数学の時間だ。数学は元々好きなんだけれども、どうもさっきの小説の最後が気になって、今一身が入らない。

カバンの中に入れるのではなくて机の中に入れて置けば良かった。

そうしたら、すぐに取り出せるのに。先生の目を盗んでちょっと読むことだって出来たのに。

ぼくには何かが欠けていると思う。

いつも。

先を見越して行動しない。

だから、時計を五分早めて、さらに五分行動をしているのに。

いつもどこかで失敗をする。

そういう奴なんだ。

東間渉という人物は。

いやになる。こんな奴。

殺したくなる。こんな奴。

でも、こんなにも憎くてしょうがない奴が、まさか自分自身だなんて。

いや。

自分自身だからこそ、こんなにも憎めるのかもしれない。
自分自身だからこそ、こんなにも殺してやりたいのかもしれない。
でも、殺すという一歩がどうしても踏み出せないのはどうしてだろう。
やはりそれも、
対照が自分自身だから、なのかもしれない。
自分を殺すというのは、自分が殺されるということと、同じだから。
殺されたくはない。
どんなに憎んでいる自分でも。
どんなに殺したい相手であっても。
それが自分。
それが私。
それがぼく。
東間渉。
全く、わがままな奴だ。
それが、ぼくの欠けている所。
欠けすぎていて、本来の姿が欠けた大きさよりも、小さい。
その小ささが、ぼくを止める。
その小さいぼくも、欠けてしまったら。
どうなるかは分からない。
ただ、本をカバンの中に入れてしまったばっかりに、そんな、くだらないことを考える。
きっと、小さいぼくは、あきれ返っているだろう。
許してくれ。
ただ、小さなぼくから欠けた、大きなぼくが暴走しただけだから。
チャイムが鳴った。
椅子から立ち上がり、起立、礼。
ぼくは立ち上がり、図書室へと向かう。

消えない靴　０２

それは、小さなぼくがとった行動だった。
大きなぼくが暴れだす。
本が読みたい。
本が読みたい。
本が読みたい！
図書室にも、本があるじゃないか。
たくさんの、ぼくの大嫌いな本たちが。
小さなぼくは、大きなぼくをいじめたいのだ、と思う。
本当は大嫌いなくせに。
本なんて。小説なんて。活字ばっかりで。
小さなぼくは、大きなぼくの苦手を知っているから、本を読ませようとする。
大きなぼくは、自分が本好きと勘違いする。
そんなことは、ないのに。
本が好きだなんて、小さなぼくが見せる幻覚なんだ。
気付けよ。
いいかげんに。
図書室に着いた。
司書の先生以外、誰もいない。授業の間の時間が十分しかないからだろう。
小さなぼくがニヤリと微笑んだ。
さあ、読みなさい。
思う存分。
ぼくが大好きな本だ。
左手で、本を一冊手に取る。
パラパラとページをめくる。
右腕の時計が視界に入った。

次の授業が始まっている時間だった。
ぼくは、本をしまうと、図書館から出た。
その行動は、一体どちらのぼくが取った行動だろうか。
それは、分からない。
もしかしたら、小さなぼくでも、大きなぼくでもなく、その二人のぼくを冷静に見つめているぼくの行動なのかもしれない。
教室に着いた。教室の時計は、授業が始まる五分前を指していた。
そうだった、ぼくの時計は五分早めていたんだった。
忘れていた。
でもそれで、しまったとか、悔しい思いはしない。ああ、そうだったと思い出す。ただそれだけのこと。
そんなことは、どうでも良かった。
大きなぼくにとっては、逆に嬉しい出来ことだった。
大きなぼくは、自分の椅子に座ると、カバンから本を取り出した。
栞の位置は、最後のページから十ページほど前のところ。
もうすぐ終わりだ。読み終わる。
そのとき、健吾が話しかけてきた。
「また本読んでいるのかよ。あきねえな」
「ああ、好きだからね」小さなぼくが、それに答えた。
「さっきどこ行っていたんだ？」
「図書室」
「げー。マジかよ。お前の人生は本一色なのかよ」
「うん、そうかもしれない」
「……まあ、いいけどさ。個人の自由だよな。でもさ、気になんないのかよ」
「なにが？」
「なにがって、完全に本の世界に入っちゃってますって感じだな……。電車が止まっていたのにお前がちゃんとこれたことだよ」
「え？」
小さなぼくは、少しびっくりした。今まで、適当に受け答えして

いたのに、いきなり何てこと言うんだ、と驚いた。

消えない靴　０３

それは、完全に忘れていたことだった。
というより、それは、完結した話じゃなかったのか？
菊間が高梨薫子に電話をし終わった後、健吾はまったく別の話をし出したじゃないか。
関係ない話を、だらだらと。
もう、終わっていたことだと思っていたのに。
いきなりなぜ、蒸し返す？
どうだっていいじゃないか。
そんなこと。
でも、ぼくはそれを口にはしなかった。
小さなぼくが、本が読めなくて暴れるぼくを止めるのに必死だったからだ。
それを見る冷静なぼくが、淡々と考えていた。そんなぼくが考えていたことなど小さなぼくは口にしようとはしないんだ。
ぼくの中で、小さなぼくが一番偉い。
なぜならば、
小さなぼくこそが、ぼく本来の姿なのだから。
それを、たまに思い出さなくてはいけない。
これは時計が五分進んでいることよりも重要なこと。
自分を見失ってはいけないんだ。
もう一度言う。
自分を見失ってはいけない。
例え、大きな自分をいじめようとしても、冷静なぼくが考えていることを口にしないとしても。
それが、ぼくなんだ。
よく覚えておけ、東間渉。
「おい、渉？　どうしたんだよ、ボーとして」

「いや、なんでもない」
チャイムが鳴った。
「じゃあな」　健吾が自分の席に戻っていく。
またしても、本を読み進めることが出来なかった。
大きなぼくは、大きく舌打ちをした。
もちろん、小さなぼくは、それを表には出さない。
本は、机の中に入れた。
だが、授業中、本を取り出す気にはなれなかった。
それは、大きなぼくが寝てしまったからだった。
お休み、ぼく。

消えない靴　０５

授業が終わった。掃除も終わって、ＳＨＲも終わった。部活には、いっていない。

だから、すぐ帰ることにする。いつもは、図書室に本を読みに行くのだけれど、本を読む気には全くならなかった。

恐らくは、本来のぼくから大きく欠けてしまった大きなぼくが、眠っているからだろう。

こんなことは久しぶりで、久しぶりの安定だった。

だから、部活に行ってもいいんだけれど、一年の十二月頃から一年ぐらい行ってないもんだから、行きづらいのもあって、ぼくの足は昇降口へ向かっていた。

そういや、部活には何部に入っていたっけ。

忘れてしまった。

駅に向かって歩いている途中、思い出そうとしたが、思い出せなかった。

まあ、良かった。部活に行こうと思わなくて。どこに行けばいいのか迷うことになっただろうから。

美術部だったかな。

吹奏楽部だったか。

運動部ではなかったことは確かだ。

写真部か。

演劇部か。いや、それはないだろう。ぼくは信号待ちをしながら吹き出すところだった。

しかし、いつも左手に何かを持っていたような気がする。それが、筆だったか楽器だったか写真だったか、台本だったか。

うむ。

……。

……ああ、そうだ。思い出した。

文芸部だった。いつも、左手にペンを持っていた。一年のとき、ノートにカリカリと文字を刻んで、時間をかけて書いた作品。それを原稿用紙に丁寧に書き写して応募したら、見ことに落選。それが、去年の十二月だったけな。

それから、部活へ行かなくなった。

がっかりしたとか、

そういうのじゃなくて。

自分が本当に書きたかった作品が、文字になって文になって、小説になって。

それで、満足だった。応募したのは部の方針だったから。一作書いて十分。ぼくが部活ですることは、もう終わった。

だから、行かなくなった。もう、次回作のアイデアとかないし、書く気も起きない。

もう、題名も内容も忘れてしまった。原稿もどこへ行ったのか分からない。でも、ぼくが書いた、ぼくだけの話。たくさんの人に読んでもらおうなんて考えない。登場人物がぼくの作った世界で今も生きていればそれでいい。

ああ。

なんだか、たくさん思い出してしまった。

久しぶりに、原稿を探して読んでみようか。

いや、彼らの世界を壊す気にはなれない。

消えない靴　06

そういえば、あのとき夢中になっていたぼくは、一体どのぼくだろう。

大きなぼく、小さなぼく、それらを見守る冷静なぼく。もっといるだろう別なぼく。

まあ、いいや。

終わったことだ。

駅にも着いたことだし。あれ、電車が三分前に発車している時間だ……。

あ、そうだった。

時計を五分早めていたんだった。と言うことは、あと二分で電車到着か。

また、忘れている。

不思議だな。

ぼくの脳は、関係がないことと、終わったことは、すぐに忘れてしまう仕組みらしい。

仕組みじゃなくて。

壊れているのかもしれない。

電車が来た。前から二番目の扉から入る。それはいつも決まっていることで、忘れないことだった。関係があって、終わっていない証拠だ。

空いていたので、ボックス席に座る。進行方向の窓ぎわ。本を読む気はしないので、流れ去る田んぼを窓から見ることにする。稲刈りが終わって、寒々としていた。

ああ、もうすぐ冬だなと思う。冬になったら、田んぼが一面雪に覆われる。雪だけじゃなくて、民家も道路も何もかも。

それを、暖房が効いた電車の窓から見るのが好きだ。まるで、起承転結が無い映画を見ているようで楽しい。

カンカンと音を立てて流れる遮断機もいい。ああ、何かに似ていると思ったら、救急車のサイレンの音に似ている。近くからと遠くからとは、聞こえ方が違うことが。

駅に着いた。ぼくが降りる駅ではない。ぼくが降りる駅よりも少し規模が小さい駅。でも、人の出入りは激しくて、何人もが電車に乗り込んできた。

ぼくが座っているボックス席にも人が座って来た。その女性は、斜め向かいに座り、バックをひざに置き、前を見すえていた。ぼくは、窓に映ったその人を観察していたが、少しびっくりしてしまった。

消えない靴　07

その女性は、もうすぐ冬だというのに、半そでのワンピースを着ている。しかも、色は真っ白。ひざの上のカバンも白で、その上に麦藁帽子も乗っている。

もしかして、もしかしなくても、ものすごく、これは、季節外れじゃないか……。

ぼくは、窓から目線を移し、その女性を少し見てみた。

窓から見ただけでは分からなかったが、女性というよりも、少女という敬称がピッタリな風貌で、その上、綺麗で美しかった。パッチリとした目と肩まで伸びているまっすぐな黒髪が、余計に綺麗で……。鳥に例えるならば、日本生まれのカナリアかな……。

「わたし、カナリアは嫌いです」　少女は、体ごとこちらに傾けて目線をぼくに注いでいた。

声も綺麗だな。本当に……。

「カナリアは嫌い。片仮名だから。すずめは好き。平仮名だから」

「へ？　すずめは片仮名でも書くんじゃない？」　ようやく少女の言っていることが分かったぼくは、返事をしてみる。

「いいえ、すずめは、平仮名です。漢字でもいいですけれど」

答えが返ってきた。言っていることが分からない。

「へえ。そう……」　一応返事をしてみる。

いつからこの会話は始まったんだ。そういえば、何でぼくの考えていることを……。

「インコも嫌い。だけど、カナリアが一番嫌い」

「どうして？」

「片仮名だから」

「ああ……」

「あなたは？」

「え？」

「あなたは、カナリアは好き？」　聞かれてしまった。ぼくは、頭の中を探す。ぼくは、カナリアが好きなのか？

「うーん、好きとか嫌いとかそういう対象ではないよ」　苦心の答えを口に出してみる。

「そうですか。では、片仮名は好き？」

「……えっと、まあ、生活には必要なものじゃないかな」

「ええ、その意見はもっともです」　少女はにっこりと微笑んだ。質問に対する答えになっていないのに……。

駅に着いた。今度はぼくが降りる駅に。

電車に降りるのが、こんなに惜しいと思ったことはなかった。

駅からは、自転車に乗って家に行く。西と東に道が伸びている道を行くので、朝には朝日が、夕方には夕日を見ながらぼくは、自転車を毎日こいでいる。

朝日はそんなに好きじゃない。眩しいから。

夕日は好き。眩しくないから。それに、雲に日を映しているグラデーションが三度の飯ほど好きではないけど、写真に取りたいくらいは好ましい。

今日は特別に綺麗だ。

気分はさっぱりした感じだ。少し寝た後のさっぱり感とはまた違う、なんていうのか、泣きはらした後のさっぱり感にとてもよく似ている。

今なら大声で笑える。そんな感じだ。でも、自転車に乗りながら、大声で笑ったりしたら、確実に不審者だろう。

消えない靴　08

朝日が昇った。朝日が好きではないくせに、朝日が昇ると何故か安心している自分に気付く。今日も今日が来た。と、当たり前のことを思う。もしかしたら、昨日の朝日かもしれないのに。明日の朝日かもしれないのに。

今日は、健吾も電車に乗るらしい。どうしてかと聞くと、「お前こそ、本を開きもしないでどうしたんだ？」と逆に聞かれてしまった。

本来のぼくから欠けた大きなぼくは、まだ眠ったままで、起きる気配を見せなかった。それは、本当に久しぶりで、ずっとこのままだったらいいなと思う。

本なんて、書きたくもないし、読みたくもない。だけれど、カバンにはいつも、文庫本が一冊入っているし、無意識のうちに取り出して、ハッと気付くことがしばしばある。

投げ捨てることができないのはやはり、大きなぼくもぼくだからだろう。

ぼくだから、たまに本を書いてやってもいい。

ぼくだから、たまに本を読んでやってもいい。

それくらいの優しさがなければ、ぼくは壊れてしまうだろう。でも、今は大きなぼくが寝ているから、気がねなく、本を破り捨てることだってできるだろう。

ほら、

ビリッと一気に。

本を持ったぼくの手に力が入る。

「何やってんだよ」　腕をつかまれた。力が抜ける。健吾だ。よけいなことを……。

「それよりさ、ほら見てみろ。ピエロがまだいるぞ」

それは、ぼくも気付いていた。昨日と同じホームで、同じ位置で、

同じことをしていた。
ただ、ひとつ違うのは……。
「……！」　ぼくは駆け出していた。背後にはもうすぐ電車が来るというアナウンスの声。
「どうし……んだ……る！」　アナウンスの声で、追いかけてくる健吾の声がかき消され、何を言っているのか分からない。
ホームを走るぼくに驚いている人々。
そんなことはどうでもいい。
ピエロに近づく。ピエロは、ぼくに気付かないで、頭を上へ下へと動かしている。
電車がホームへ滑りこんできた。
健吾がぼくの肩をつかんだ。
「どうしたんだよ、渉」
ぼくには、ピエロも電車も健吾も目には入っていなかった。
「……カナリア」
「は？　どうしたんだ」
ピエロをながめていた少女が、昨日のカナリアが嫌いと言った少女に見えた。
それだけだ。

消えない靴　09

勘違い。第一、服装も髪型も全然違うじゃないか。
どうして、
どうして走り出したのか。
「ほら、電車が出るぞ」
電車に乗る。扉が閉まって走りだす。
ピエロはまだ、同じ動作を続けていて、
少女もまだ、ピエロを見ていて、
ぼくもまだ、その少女を見続けていた。
見えなくなっても。
ずっと、ずっと。
「どうしたんだ？　ピエロがそんなに気になったのか？　――まあ、気にはなるけどさ」健吾がぼくに話しかけてくる。「ああ、それとさ……、カナリアって何だ？」
「鳥」
「ああ、そうか……って、そんなこと知っているって」
「それより、今日の五時間目だけど……」
「ん？　何だ」
大きなぼくが一部目覚めた。ほんの一部が。そのぼくが、健吾と気さくに話しだす。
「うわ、宿題？　ああ、あったなあ、忘れてた……」
「ほら、やっぱりね。見せてあげようか？」
「助かる！　さすが渉だ」
「あれ……ちょっと待って。あ、ぼくもやってなかった」
「マジかよ。何だそれー」
「ごめん、ごめん。やってたと思ってた」
普段のぼくなら絶対そんな会話はしないだろう。だろう、ではなくて、確実にだ。

とにかくは、はぐらかすことができてよかった。
会話は、一部の目覚めたぼくに任せて、小さなぼくは考える。
何故ぼくは、走り出したのだろう。
何故ぼくは、少女に会おうとしたのだろう。
会って何がしたかったのか。
何故間違ってしまったのか。
少女は、ピエロを何故見ていた？
そういえば、電車に乗らなかった。乗らないのなら、何故ホームにいた？
どれも答えは出なくて、
疑問だけが膨らんだ。
だけど、
混乱は全くしなくて、
逆に清々しい。
気が付いたら、電車から降りて学校への道を歩いていた。
ぼくとは違うぼくに任せると、他の事に気をとられずに物が考えられる。
これは便利だ。
使えると言ったら、ぼくに失礼だろうか。でも、ぼくだから、ぼくの腹が立たなければ、い いのかもしれない。
「今日は普通に来れたな」
「え？」
「いや、電車だよ。電車。昨日、電車止まったのに、お前来れたじゃん」
「ああ、そうだね」　ぼくは微笑みながら言った。また、同じことを言っているのか……と思いながら。
もしかしたら、ぼくは性格が悪いのかもしれない。
「どうしてだろうね。ああ、分かった。何か、怪奇現象とかが原因だね。多分」
「んなわけ無いだろ」　本心とは、関係がないことを言うぼく。

そういえば、健吾はぼくの変わりように気付いているのだろうか。
そんな気配は無いけれど。もしかして、元々ぼくのことを変な奴として認識されていたりするのか。
まあ、いいか。別に。
……。
この諦めの良さが性格の悪さの原因か？
直そうとしないからだろうか。
まあ、いいか。
……。
……まあ、いいか。
信号が赤になったので、止まる。車は全く通らない。つくづく田舎だと思う。
「きっと何か物理的な物だよな」　健吾が腕組みをしながら言う。
「そうだね……。ぼくのおじさんに電次郎という人がいて、その人の車に毎朝乗せてもらっているから、ぼくは毎朝電車に乗って学校に来ているんだ……。とか？」
「……それは物理的なのか？」
「さあ」

消えない靴　１０

信号が青になったので、歩き出す。
「事実なのか？」
「さあ」
「あのさ、お前ミステリィとかよく読んでいるだろ。なんか無いのか？　そういうトリック」
「……無いね」
ぼくは、本を読み終えたら、すぐにその内容を忘れてしまう。だから、こういうトリックがあったとしても覚えていないし、覚えようとも思わない。読んでいるそのときだけ覚えていれば、それでいい。実は昨日まで読んでいた小説の内容も忘れてしまった。その話に出てくる探偵の名前は印象に残っているけれど、話自体はよく覚えていない。少し読めば思い出すかもしれないが、今はとても読む気になれない。
つくづく、記憶力が無いと思う。
これは、性格の悪さよりも悪いところだと思う。性格は、直そうと思ったら　（思わないが）　直せるが、記憶力は生まれつきだと思うから仕方が無い。
もしかして、本はぼくにとって、関係がなく、終わったものなのだろうか。
そうかもしれない。
だって、本は大嫌いなのだから。

学校に着いた。昇降口で靴を上靴に履き替える。
「おいおい……」　健吾がつぶやいた。
「どうしたの？」
「どうしたもこうしたも無い。誰もいないじゃないか……」
「え？」　周りを見渡す。ぼくが下駄箱を閉める音だけが昇降口

に響き、朝のざわめきはなかった。
「マジかよ……」
「それ、口癖？」
「……行くぞ」　ぼくの言ったことを無視して健吾は歩き出した。背が高い健吾の後を追う。そういえば、野球部のキャッチャーとか言ってたなとふと思い出す。ただそれは、健吾の体つきから連想しただけかも知れないから定かではない。というより、連想だけの確率が高い。なにせ、自分の部活ですら覚えていなかったのだから。
教室の前に着いた。扉に付いている窓から見た限りでは、誰もいないように見える。
「開けるぞ」　何故わざわざそんなことを宣言しなければならないのか。もしかして、普段も宣言していたから扉をあげたりするのだろうか。そうだとしたら、ぼくに負けず健吾もかなり変な奴の部類に入るだろう。
「うわっ」　扉を開けた健吾が、後ろへ飛び退いた。
「……菊間？」　扉から飛び出したのは菊間乃里だった。
「あのね、まだ誰も来ていないの！」　扉の窓は小さいから、死角になって菊間は見えなかったのだろう。
「へえ」　ぼくは軽く返事をすると、教室に入った。その言葉通り誰もいなかった。
「どうしてだ？　菊間」　遅れて教室に入ってきた健吾が聞く。
「分からない。かんなと薫子に電話しようと思ったんだけど、全然通じなくて……」　菊間は携帯電話を両手に握り締めながら話した。　「そういえばね、昨日、かんなと薫子が休みだったの」

消えない靴　１１

「へ？　だって電話で高梨と話していたじゃないか。電車に乗るって……」　健吾は扉の近くにあった机にカバンを置くと、ベランダに出た。

「そう。なのに休みだったの。おかしいよ、絶対」　菊間もベランダに出る。ぼくも、近くによってみる。

「誰もいないな……」　健吾はベランダの手すりに手をかけてつぶやいた。

ここのベランダは二階にあって、正門がよく見える位置にある。ぼくも見たけど、やはり誰もいなくて、先生たちの駐車場も見えるんだけど、一台も止まっていなかった。そのことを言うと、「わたし、職員室に行ってみる。東間君も来て」　と菊間は言い、ベランダ沿いに歩き出した。ぼくも後を追う。同じ階にある職員室にベランダから侵入するつもりだろう。

職員室に行く途中にも、教室が何個かあるので見てみるが、誰もいなかった。

職員室までは意外と遠く感じた。恐らくは、廊下よりもベランダのほうが狭いし早く歩けないからだろう。

「ここね」　職員室に近づくと菊間は、窓からそっと職員室を除き見た。どうやら、侵入するつもりはないらしい。

ぼくも菊間に近づいて見てみる。

「……誰もいないね」

「うん、入ってみよう」　菊間は窓に手をかけた。侵入するつもりらしい。そういえば一週間後はテストだ。と思い出す。職員室は先生がテストを作っているから進入禁止のはずではなかっただろうか。まあ、窓が開くわけが無いけれど。

「うーん、開かないなあ」　菊間は五、六枚ある窓を一つひとつ手で開けようとしていた。

「あ」
カラリと音を立てて窓が開いた。最後の窓、職員室の一番端側の窓が開いた。
「開いたよ。東間君。早く早く」　ぼくは反対側の職員室の端に突っ立っていたので、菊間に呼ばれた。
「これ、防犯になってないよね」　ぼくが行くと、菊間がクスリと笑って言った。
「中に入って、何をするわけ？」　ぼくは当然の質問をした。なぜなら、もし、先生が来たときのリスクはとても大きいからだ。製作中のテストを見に来たと思われてしまう。まあ、そんな大事なものを机の上にあげて帰る先生もいないと思うけれど。
「カレンダーを見るの。今日は休みか、何かの行事なのかとか。わたしたちのカレンダーじゃあてになんないでしょ」
なるほど。
職員室に入って、廊下側に掛けてあるホワイトボードを見る。細かすぎるほどの日程が書いてあった。
「えっと、今日何日？」
「五日」
「ええっと……」　菊間が五日の欄の日程を読み上げる。　「五分短縮授業。考査七日前のため部活動なし……」
「へえ、テスト前って部活休みなんだ」　それは知らなかった。四日の欄を見ると、昨日も休みだったらしい。ということは、部活に行かずにそのまま帰るんだから、ほとんどの生徒は、昨日ぼくが電車に乗る時刻と同じだったってことになる。それにしては、すいていたような気がする。
「知らなかったの？　あ、東間君部活に行ってないんだ」
「うん」　ぼくは、首振り人形のように頷いた。
ガラリと扉が開いて人が入ってきた。最初は健吾だと思って振り返ったら、なんと先生だった。
「何をやっている？」　腕を組みこちらを睨みながら、ぼくたち

のクラス担任の佐藤先生が言った。ああ、これはマズイ。別に食べ物を食べている訳ではないが、マズイ。おいしくはない。

消えない靴　１２

「お早うございます」　うろたえているぼくの目の前へ菊間がスッと進み出て挨拶をした。ぼくもそれに習う。
「お早う」　先生も挨拶を返してくれる。だが、目の鋭さは消えない。　「で、何をしていた？」
「えっと……」　ぼくがさらにうろたえると、菊間がさらさらと今までの経緯を説明した。情けないぼく。
「そうか……」　目線をぼくたちから空中に移し、さらに目線を強くする先生。
「車が一台も見当たりませんでしたけど、先生はなにで来たのですか？」
「学校の近くに住んでいるからな。自転車だ」　目線が菊間に移った。
「どうして誰も来ないのですか？」
「誰も？　いや、校長と事務員が二人いたぞ。……生徒はお前ら二人だけか？」
「いや、健吾……網野が教室にいます」　ぼくは言う。先生は教室全てを見て回ったのだろうか。校長室とか事務室は見たようだけれど。
「そうか。他の教室にも生徒がいるかもしれないな。放送でここに呼び出すか」　と言うと先生は教室から出て行った。やはり、教室を調べていなかったらしい。
「頼りないなあ」　ボーとしているぼくに菊間がクスリと笑って言った。その顔が、カナリアが嫌いと言った少女と重なった。
「……あ」
「何？」　違う。明らかに。少女と菊間は全然違うじゃないか。少女の方がもっと綺麗で……。
チャイムが鳴った。授業が始まるチャイムではない。ピンポンパ

ンボーンという放送を始める合図のチャイムだ。
「――えー連絡します。教室にいる生徒、その他校舎にいる生徒は至急職員室に来なさい。繰り返します――」
「実は皆でかくれんぼしていたりしてね。わたしたちが鬼でさ」
何がおかしいのかクスクス笑い出す菊間。
「さあね」
もう、その顔は少女と重ならなかった。

消えない靴　１３

十分後、職員室にはぼくらを入れて六人の生徒が集まった。一年生が二人、三年生も二人で、健吾は来なかった。五分前にぼくの携帯電話で電話をしてみると　「ああ、今トイレに入っているんだ。え？　放送なんて聞こえなかったぞ。まあ、いいや。今から行く」と言って電話が切れてそれきりだ。何をやっているんだか。

「六人だけですか……」　校長先生も職員室にやって来た。表情からして、ぼくら六人　（健吾も入れて七人）　以外の生徒が学校をサボっていると思っているのだろう。もしそうなら、校長は生徒たちの協調性を褒め称えなくてはいけない。

「どうしますか。今日は休みにしますか」　佐藤先生が校長に向かって話した。さっきまでの目の鋭さは消えていた。

たぬき校長という渾名をもつ校長は、自慢の腹の上で腕組みをしながら考えている。

「うーん、どうしますかなあ。佐藤先生一人だけでは授業も出来ないだろうし……」　だろうじゃなくて確実に無理だ。この思いはぼくだけでなく、佐藤先生も含めたこの場全員の思いだろう。

「仕方がありません。今日は休みにいたしましょう」　腕組みを解いて、無理に笑顔を作ろうとして泣きそうな顔になりながら校長が行った。　「明日もこのような状態になれば、また休みになるかもしれません。その連絡を、佐藤先生にお願いします」　弱々しい声で話し、職員室を出て行く校長。

ひそひそ声で話し、時折笑っている三年。

佐藤先生を不安そうに見ている一年。

何もしていないぼくら二年。

沢山並んでいる机の中で何かを探している先生。

そのひそひそ声と物を探す音以外何も聞こえない職員室。

これからどうなるのだろう。

消えない靴　１４

慌ただしくて気付かなかったが、大きなぼくから目覚めた一部のぼくは、この慌ただしい中また眠り始めていて、小さなぼくも半分寝そうになっていた。だから、先生が来てうろたえたり、ボーとしていたりしたのだろう。……はい、言い訳です。元々こんな奴なんだぼくは。

急がない。焦らない。迷わない。

それは、目指していることで、ぼくはそれではない。

憧れているだけ。

羨ましいだけ。

でも、いつかそれをぼくの物にしたい。

いつかきっと。絶対。必ず。

「ああ、あった」　机の上にある紙の山から白紙の紙を一枚取り出す先生。崩れる紙の山。

「あわわわわ……」　先生、慌てて手を添えるが何もならず。

「何やってんですか」　落ちている紙を拾う菊間。ぼくも拾う。

「ああ、すまん、すまん」　ぼくは、拾った紙を先生に渡す。チラリと見ると、なんとテストだった。佐藤先生は国語の先生だから国語の問題用紙。そのことにびっくりしたぼくは、問題を何も覚えられなかった。ああ……。

「テスト一週間前だということは知っているな。自宅で自習をしていること」

「はい」

「二年は、わたしについて来て学校の見回りをしてもらう。網野がまだ来ていないな？　網野が来てからにしよう。それでは、解散」

一年と三年は職員室を出て行った。

「なんで、二年だけ残るんですか？　わたしだってテスト勉強したいのに」

「人数が多いほうが探しやすい。それに、帰ったって勉強なんてしないだろうが」
「あ、ひっどい。それ先生が言う言葉？」
「まあ、ちょっとの間だけだから、手伝ってくれ。なあ、東間」
突然呼ばれてぼくはびっくりした。
「はい？」
「網野はどうした？」
「あ、電話かけてみます」
ところが、電話には健吾は出なくて、教室に行くと、もうすでにカバンがなくて、帰ったようだった。
「なんだあ、先に帰ったのか」　と、先生は大して不思議がらずに、ぼくと菊間に南棟を見て回るよう指示した。
「まったく、先に帰るなんてひどいよね」
南棟に行くには、一度昇降口を通らなくてはいけない。
ぼくは何気なく、健吾の下駄箱を開けた。
「なになに、いたずらするの？　大歓迎だけど」
別に意味はない。だけど、いたずらするのも面白そうだ。
「……」
「……あ、なんだ。居るんじゃん」
そこには健吾のスニーカーだけが、あった。

なはす線路　01

校舎を見てみるも、健吾の姿は見えず、そのまま放課となった。携帯にも出ないし、スニーカーはそのままだ。

「――校舎を隅々まで見たわけじゃないし、どこかにかはいるよね」　そう、菊間はぼくに笑いかけた。が、何か作っている笑いだった。

「ああ、わざわざ探すこともないだろう。もう高校生なんだし」

今は、駅に向かって歩いている。

「なあ、なんで菊間が駅に向かっているんだ？」

「ん？　東間君が電車に乗ろうって行ったんじゃない」

そうか。そうだった。

何かがある気がした。電車に。

「電車賃はおごってよね」

「ああ、別にかまわないけど」

「……」

「……」

「あのさあ……」

「なに？」

「何か話さない？」

「何を？」

「んー……。別に、話すこともないか」　菊間はそう言うと軽くため息をついた。

切符の販売機に百九十円を投入する。一枚購入。

「はい」

「どうも、あ、そうか東間君は定期なんだね」

「うん」　ピッと改札を通る。

ベンチに座って電車を待つ。次の電車まで幸運にもあと十五分だった。この線は一時間に一本しか走らないので、もうかなり前に前

の電車が行ったことになる。
「ねえ、聞いてなかったんだけどさ」　菊間が携帯を見ながら話しかけてくる。
「なんで、電車に乗るの？　これ、最初に聞くべきことだったんだけどさ。どこかに遊びに行くとか？」
「さあ？」　ぼくは首をかしげた。ぼく自身も、なんで菊間を誘ったのか分からない。
「さあって……。まあ、いいけど。今日は暇だし」
「テスト勉強は？」
「あ……」
電車が来た。二両編成の短い電車が。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2325f/

電車ピエロ

2010年10月21日23時43分発行